

あゝなつかし遠<sup>とほ</sup>ちの山かけ

四とせの月日なつかしく み空の星をながめては

指をりわがせ數ふらん 門べに我妹<sup>いも</sup>子ながむらん

いや長さこんとしつき

花のわけばの月のかげ まなびの窓<sup>まど</sup>のいそしみを

はやくも卒<sup>そく</sup>てとくとくと 飛びても行かん里の家

はや行かんかのみ空

瀧

東くめ子

はとばしるみなわに袖はぬるゝとも

よりにながめん瀧のしら糸

天の原仰けは高し雲間より

みなぎりおつる峯の瀧津瀬

亡友をおもひて

同人

夢のうちになし歌聲ありしごと

うつくしかりき今はなき友の

我伯母上

しのぶくさ

我母方のをば上は、母上よりは妹にたはしまして、御歳は、四十の上に二ツ三ツ出て、給ひぬれど、ほどよりはいと若やきてなん見え給へりし。そは御子もち給はぬ故にやと思はる、我ははらから多くして、幼き頃より伯母上の許にて、人となりぬるに朝夕、誠の母にもまして、まめやかに我を愛し給へり。我くに出でん時にも、返すくも諭し給ひけるやう、衣服調度は更にも云はず女のたしなみは、かくあるべきものぞ、故郷の空をのみ、徒らになつかしむなよ、一度出でたらんからには、歸着でやは立歸るべきなと、こまくとしひき、かくて年毎の休みには、うからやからの顔見るとを樂しみつ、歸着しぬ、そのほとは照る日かしく、夏の盛も、春風の和らかなるが如き、心ちするまとおに、長き月日の過ぎ行くをも、知らずなん、別けて去年の歸着には伯母上も健かにて、迎へ給ひ、我もうれしく、冷々しき夜のそゝるありきなどには、いつもく伴はれき。

さる程に、八月の半、姉上の御いたつき、重くおはする。し告げ來ぬ、驚きて姉上が行きて、夜盡心を盡してみとり參らせたりその間十數日が程伯母上にめがれけるを、伯母上は姉上の御病、いかにくと打案し給ひ、飲食廢臥も安からず在しきとぞ、かくて珍らしきものなど、調しては、みどりせる我らにさへ、數里へたゝれる處より、送り給へり、さしも重かりし姉上の御心ち稍々怠り給ぬれば、また伯母上の許にかへり行きて、かたみに喜ひあ

べりしが、我は出立の用意に忙しく、それより五日ありて、東上の途に上りぬ。波止場なみどまりに立ちて、涙くみ給へる。伯母上の御かほの、今も目の前にありて、いつの世に忘らるべき、かくて我は事なく東上し伯母上より、喜びの玉章たまじょうなとれさせ給ひて、三つきがほどはゆめのまに過し、十一月の半、伯母上の重くわづらひ給ふよし報せあり、驚かれてその文を、たにきれるまゝにて暫しは途方たつちにくれてありしが、友なる人に勸まされて、逸早く案じ出たし、鄙びんには非らじと思ふ、くさくさの果物取そろへ、箱に入れて、小包郵便に托しぬ、やがて半時も経るに、戸口には電報の聲すなり、臆を冷して封おし開けば、兄上の許より、伯母上のなくなり給へるよし、告おこせ給へるなり。嗚呼このたより、今少し聞かで、あらましものをと、文明の利器も、時にとりては恨みられき、さても一度は、御命の程もいかにかと聞えし姉上は今も安らげく在して、それが爲めに、心をなやまし給ひし伯母上の、むなしくなり給ひぬるよし思へば、はかなきものは、人の世になん。目のあたり聞え上たき事の數々、あるにと打かこども幽顯界ゆうけんがいを異にして見まゐらすべき由も、なきぞかなしき。さるにても一片の紙のはしに、告げおこせし言葉の、いかで、我心に世になき人と、思はしむるを得んや、ことしの歸省きせうにも波止場に立給て、打笑みつゝ迎へ給ふ、伯母上のおはするものと、のみ思ひて、旅立つなるべし、さは云へさ、今は世にいまさぬものを、嗚呼如何にせん、今は世にいまさぬ我伯母上よ。

〓

遊戯の方針 (承前)



町田則文

それならば前のやらな事實がある、然らば教育上ドウ云ふ風に考へたらば宜いか、前の事實を下ウ云ふ風に教育的に應用すれば宜いかと考へれば左の三ツに應用して考へたならば宜からうと考へる第一は男子と云ふものに就ては兎角野蠻とくかくやばんの風を餘程帯びて居る、殊に其粗暴も十歳位か最もヒドイ、十七八歳にもなると一般の事を考へる、十歳から十一歳頃は自分勝手さいざうでやると云ふ傾きがある